

## 北村透谷の著作と中国文学の対比研究：受容と影響の可能性についての試論

楊, 穎

<https://doi.org/10.15017/1440993>

---

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 楊 穎

論文題名 : 北村透谷の著作と中国文学の対比研究  
——受容と影響の可能性についての試論——

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

透谷の著作に対する外国文学の影響については、「楚囚之詩」に対するバイロンの『シヨンの囚人』、「蓬莱曲」に対するバイロンの『マンフレッド』などの影響について従来、かなり具体的に論じられている。またゲーテの『ファウスト』やシェイクスピア、エマーソンなどとのつながりについても議論されている。しかし、透谷と中国文学との関係については、まだはっきりしない点が多い。

本論文は、透谷と中国文学との親近性を探求することを目的としている。両者のつながりについての先行研究は多くなく、しかも、主に透谷の評論に関わるものに限られている。本論文では、従来、透谷の評論に限定されていた観のある中国文学との影響関係の考察の範囲を詩、戯曲、小説といった創作にまで拡大して検討したい。

序章では、透谷に対する外国文学の影響についての先行研究が西洋文学からの影響の研究に偏りがちであり、中国文学との関係の考察がやや閑却されてきたことを指摘し、中国文学との関係についての先行研究の不備について言及する。その上で、本研究の目的、研究対象、研究方法などを提示する。

第一章では、透谷の少年期の家庭環境、教育環境、縁者や友人、透谷自身が作った漢詩などを検討することにより、透谷が早くから中国古典文学に親しむ環境にあり、十分な漢学の素養を身につけていたことを指摘する。

第二章から第三章まで、透谷の詩と小説の二つのジャンルに分けてそれぞれ中国古典文学との関連性を論じる。

第二章の第一節では、透谷の処女作「楚囚之詩」の「楚囚」に焦点を絞り、「楚囚之詩」に現れる主人公の感情の意味合いを再検討した。具体的に言うと、「楚囚之詩」の「楚囚」という言葉に関して、これまで指摘されている『春秋左氏伝』や「正気歌」の中に出てくる「楚囚」とは意味合いが異なっていることを論じた上で、屈原の『楚辞』との親近性を論じる。すなわち「楚囚」とは、透谷が楚国の屈原の愛国的感情を借りて同志であった大矢正夫を暗示したものであり、「楚囚之詩」は、屈原の『楚辞』の比興の手法に依拠して、透谷と大矢の昔の友情を回想した作品であることを論じる。

第二節では、劇詩「蓬莱曲」とこれまで指摘されている白楽天の『長恨歌』と『琵琶行』との具体的な類似性をまとめた上で、現実世界で愛していた女性が死後、仙女になったというストーリーのヒントを『長恨歌』から得た可能性について、透谷の日記を援用しながら考察した。また、中国の歴史書に依拠することによって、透谷が十八歳の時に登った富士山を「蓬莱山」と命名した可能性、および「蓬莱曲」の結末の「湖を過ぎて彼岸に達する」という設定について考察した。さらに、

「蓬萊曲」の「序」、曲中の人物名、構成などに含まれる、中国古典文学にしばしば見られる要素を明らかにし、唐代伝奇の『枕中記』や『杜子春伝』、『遊仙窟』との具体的な類似点について考察する。

第三節では、透谷の抒情詩の全体像を概観した上で、「ゆきだふれ」、「髑髏舞」、「ほたる」および蝶の三部作などと中国古典文学との関連性について論じる。具体的にいうと、明治二十五年十一月五日に発表された「鬼心非鬼心（実聞）」の最後の部分に、陶淵明の「乞食」に感動したことが述べられていることを手掛かりとし、透谷の「ゆきだふれ」と陶淵明の「乞食」との類似点を考察する。「髑髏舞」については、従来指摘されていない、白楽天の『琵琶行』との関連性について考察する。また、透谷の詩の分野での絶筆となる「露のいのち」を描き出すまでの五ヶ月の間に、ほたる、蝶、露の三つのイメージが使われていることに着目し、「ほたる」と杜甫の「螢火」、蝶の三部作に響いている秋と死のイメージと白楽天の「秋蝶」とのかかわり、あるいは『梁山伯と祝英台』の物語との関連性について考察する。

第三章では、透谷の三篇の小説を取り上げ、特に、当時の文壇で論議をかもした「宿魂鏡」について詳しく検討する。第一節では、「宿魂鏡」に関する従来の研究を概観する。

第二節では、「宿魂鏡」の「幻鏡」という装置に焦点を絞り、「宿魂鏡」以前の透谷の著作で、「鏡」がどのように表現されているかを調査した上で、明治二十四年の「蓬萊曲」の「魂鏡」、後の評論中で用いられる比喻としての鏡をへて、再び「幾千年前」に作られた神秘的な「宿魂鏡」で、「魂鏡」を宿そうとした透谷の意図を推測する。

第三節では、「古鏡」について、従来指摘されている『紅樓夢』との類似点と相違点をそれぞれ分析した上で、特に、その相違点に注目し、中国古典文学に見られる鏡に関する説話と結びつけ、そこから透谷が受容した可能性のある作品との関連性を考察する。

第四章では、中国近代文学界における透谷の受容について論じる。第一節ではアヘン戦争、日清戦争に相次いで敗れたという背景のもとで強い危機感と責任感を抱いて日本に留学した魯迅と周作人が、どのように日本の浪漫主義に出会い、影響を受け、日本の浪漫主義の先駆者である北村透谷とどのようなかかわりを持ったかという点について考察する。

第二節では、近代中国における北村透谷についての研究の状況をめぐって、戦前と戦後に分け、それぞれ紹介した上で、透谷研究に関する不備を指摘する。

終章では、各章をまとめる形で透谷の著作に見られる中国的な要素の特徴を総括する。透谷は漢学の素養に優れ、漢学の知識を摂取し、血肉化していることを強調する。